九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Effects of Breastfeeding on Stress Measured by Saliva Cortisol Level and Perceived Stress

水畑, 喜代子

https://hdl.handle.net/2324/4474994

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（看護学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	水畑　喜代子
論　文　名	Effects of Breastfeeding on Stress Measured by Saliva Cortisol Level and Perceived Stress （ストレスに対する母乳育児の効果　－唾液中コルチゾール値と知覚ストレスの測定－）
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　橋口　暢子 副　査　　九州大学　　教授　　鳩野　洋子 副　査　　九州大学　　教授　　後藤　健一

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究の目的は、母乳育児における吸啜刺激とストレス抑制の有無、また、ストレスと産後うつ症状に対する母乳育児の影響を明らかにすることである。

研究対象者は、産後 2 週間、1 か月健診または産後の母子クラスに来院した母親 79 名である。授乳前後の唾液の採取と、質問紙調査を行った。唾液検体は、Cortisol(Saliva)EIAkit を用い、競合酵素免疫測定法にて解析を行った。なお、コルチゾールの解析は、授乳前後の唾液の採取ができた 72 名のうち、%CV 値を考慮し 50 名の唾液を分析対象とした。質問紙調査の項目は、基本属性、エジンバラ産後うつ病質問票（EPDS)、知覚ストレス日本語版質問票（PSS-10)、母乳育児セルフエフィカシー尺度（BSES)、授乳状況（授乳方法、授乳回数、授乳時間、授乳に関する困難の有無）であった。

その結果、直接授乳時間（吸啜時間）は平均 16.5±7.0 分で、唾液中コルチゾール値の授乳前後の変化量と吸啜刺時間とに有意な負の相関があった（r_s=-0.333 $p<0.05$)。また、授乳方法の違いでは、母乳が主体の混合栄養群では、授乳後の唾液中コルチゾール値は授乳前に比べ有意に低下し（$p<0.01$)、人工乳主体の混合栄養群では、授乳前後に有意差が認められなかった。PSS-10 得点を従属変数とした重回帰分析の結果、母乳栄養の母親は混合栄養の母親に比べ、PSS-10 得点が低く知覚ストレスが低かった（β=-0.260、$p<0.05$)。一方、産後うつ傾向と栄養法との関連は認められなかった。

以上、母乳育児は、直接授乳の吸啜刺激により唾液中コルチゾール値を低下させ、知覚ストレス得点の低下をもたらすことが明らかとなり、母乳育児は母親のストレス低下に関与することが示唆された。本研究の結果は、産後の母親の母乳育児支援の上で意義ある研究と考えられる。

予備調査において、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を口頭および紙面にて行い、おおむね適切な回答を得た。よって、本論文は予備調査委員合議の上、博士（看護学）の学位に値する論文として、価値あるものと認める。

主査　橋口暢子
副査　鳩野洋子
副査　後藤健一